

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年4月11日現在

機関番号：14401
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2011～2012
 課題番号：23792749
 研究課題名（和文） 多胎児の父親のワーク・ライフ・バランス：育児参加が父親に与える影響の検討
 研究課題名（英文） Work-life balance of fathers of twins: What kind of influence does childcare participation have on fathers?
 研究代表者
 林 知里（HAYASHI CHISATO）
 大阪大学・大学院医学系研究科・特任講師（常勤）
 研究者番号：50454666

研究成果の概要（和文）：

単胎児と多胎児の父親における子育て観、母性神話に対する価値観、育児参加を促進する要因を明らかにすることを目的とし、アンケート調査を実施。「父親の子育て参加度」を従属変数に回帰モデルを作成した結果、子どもが0歳時点では、「多胎」「妻の妊婦健診に付き添ったことがある」「子育ての悩みを友人・同僚に相談したことがある」「妻は、子育てに関する自分の頑張りを誉めてくれた」「子育ては、男女ともに協力して行うものである」「子どもを育てることに余り関心が持てない」で回帰係数が有意であることが確認された。

研究成果の概要（英文）：

Purpose: The present study was conducted to identify factors that encourage fathers of twins and single children to be involved in parenting. Methods: Self-administered questionnaires were distributed to fathers of twins (1,016) and single children (300). Responses were obtained from 211 and 101 fathers of twins and single children, respectively (response rate: 20.8 and 33.7%). Results: A regression model was created with the level of fathers' involvement in child-raising as a dependent variable. Regression coefficients for the following items were significant when their children were 0 years old: "Multiple births", "I have accompanied my wife to a prenatal checkup", "I have consulted my friends/colleagues over parenting", "My wife praised me for my efforts in child-raising", "My wife praised me for my efforts at work", and "Husbands and wives should cooperate with each other to raise children".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学、地域・老年看護学

キーワード：公衆衛生看護、多胎、育児参加、父親

1. 研究開始当初の背景

近年、男女共同参画社会の実現、少子化問題、子どもの社会性の発達や父親自身の人格的成長、QOL やワーク・ライフ・バランスなどとの関連において、父親の育児参加が注目されている。多胎児の父親は単胎児の父親より積極的に育児参加するものが多いとの報告があるが、育児参加が父親に与える影響について多胎児と単胎児の比較をした調査はない。また、どのような要因が父親の育児参加を促進するのか、また、どのような要因が父親の育児参加を抑制するのかについては未だほとんど明らかになっていない。

2. 研究の目的

単胎児の父親と多胎児の父親では、子育て観や次世代育成観、母性神話に対する価値観、仕事観について違いはあるのか、また、単胎児と多胎児の父親の育児参加を促進する要因を明らかにすることを目的とし、父親の育児参加度と父親準備性、ソーシャルサポート、子育て知識を得る方法、子育て観・次世代育成観、子ども観の関連を調査した。

3. 研究の方法

A. 対象者の選定とデータ収集

多胎児の父親においては、多胎児の母親が互いに育児情報を伝え、支え合うことを目的とし 1967 年に設立されたボランティア組織である「ツインマザーズクラブ」の会員家庭を対象とした。単胎児の父親においては、A 小中一貫校に通っている児童・生徒の父親および B 大学に在学中の生徒の父親を対象とした。

ツインマザーズクラブの会員家庭には、2011 年 8 月に無記名自己記入式アンケート用紙および返信用封を送付し、回収した。A 小中一貫校および B 大学の児童・生徒の家庭に対しては、2011 年 11 月に児童・生徒にアン

ケート用紙および返信用を配布し、後日返信用封筒に入れて学校に持参してもらい回収した。結果、211 名の多胎児の父親から回答を得た（回収率 20.8%）。また、101 名の単胎児の父親から回答を得た（回収率 33.7%）。

B. 調査項目

調査内容は、父親・母親の年齢、職業、父親準備性、子育て観・次世代育成観(14 項目)、母性神話(3 項目)、仕事観(17 項目)、子ども観(20 項目)であった。子育て観・次世代育成観については杉山(2010)¹⁵⁾を参考に、仕事観及び子ども観については、福丸(1999)¹⁶⁾を参考に作成した。各項目において、「そう思わない：1 点」から「そう思う：4 点」の 4 段階で回答してもらった。

また、「育児参加程度」について、「ほとんど参加していない」「あまり参加していない」「人並みに参加」「積極的に参加」の 4 段階で回答を得た。

4. 結果

「子どもが 3 歳になるまで、母親は育児に専念するほうがよい」「子どもを出産した後は、母親は仕事をやめたほうがよい」といった、「三歳児神話」や「母性神話」については、多胎児の父親は単胎児の父親と比較して反対側が有意に多かった。「子育ては自分の自由時間を奪う」「仕事は自分の自由な時間を奪う」「子育て中は、勤務時間を自分で調整できるほうがよい」は、多胎児の父親で賛成側が有意に多く、「育児休暇を取ると昇進にひびく」は、多胎児の父親で反対側が有意に多かった。

「父親の子育て参加度」を従属変数に子どもの年齢別に回帰モデルを作成した結果、子どもが 0 歳時点においては、「多胎 ($\beta=0.116$, $p<0.05$)」「妻の妊婦健診に付き添ったことがある ($\beta=0.175$, $p<0.001$)」「子育ての悩

みを友人・同僚に相談したことがある ($\beta = 0.138, p < 0.01$)」「妻は、子育てに関する自分の頑張りを誉めてくれた ($\beta = 0.397, p < 0.001$)」「妻は、仕事での自分の頑張りを誉めてくれた ($\beta = -0.138, p < 0.05$)」「子育ては、男女ともに協力して行うものである ($\beta = 0.172, p < 0.01$)」「子どもを育てることに余り関心が持てない ($\beta = -0.139, p < 0.01$)」で回帰係数が有意であることが確認された。調整済み R^2 乗値 = 0.346 であった。

また、子どもが 1~2 歳時点においては、「妻の妊婦健診に付き添ったことがある ($\beta = 0.146, p < 0.01$)」「妻は、子育てに関する自分の頑張りを誉めてくれた ($\beta = 0.279, p < 0.001$)」「子育ては、男女ともに協力して行うものである ($\beta = 0.151, p < 0.01$)」「子どもを育てることに余り関心が持てない ($\beta = -0.202, p < 0.001$)」「子育ての方法を学ぶために本や雑誌を読んだ ($\beta = 0.136, p < 0.01$)」で回帰係数が有意であることが確認された。調整済み R^2 乗値 = 0.304 であった。

さらに、子どもが 3~5 歳の時点のモデルにおいては、「妻の妊婦健診に付き添ったことがある ($\beta = 0.127, p < 0.05$)」「子育ての悩みを友人・同僚に相談したことがある ($\beta = 0.127, p < 0.05$)」「妻は、子育てに関する自分の頑張りを誉めてくれた ($\beta = 0.317, p < 0.001$)」「妻は、仕事での自分の頑張りを誉めてくれた ($\beta = -0.157, p < 0.01$)」「子どもを育てることに余り関心が持てない ($\beta = -0.252, p < 0.001$)」「子育ての方法を学ぶために本や雑誌を読んだ ($\beta = 0.163, p < 0.01$)」で回帰係数が有意であることが確認された。調整済み R^2 乗値 = 0.295 であった。

5. 考察

多胎児の父親は、単胎児の父親と比較して、積極的に育児参加している者が多く、育児の担い手として実質的に育児に関わる経験が、

母性神話や三歳児神話に対する価値観や子育て観に影響している可能性が示唆された。

父親の育児参加を促進する要因として、「妻の妊婦健診に付き添ったことがある」の項目が影響していたことは、父親準備性と育児参加の関係性が示唆される。妻の妊婦健診に付き添ったことのある父親は、そうでない父親と比較して父親準備性が高く、そのことが育児参加度を高めていたと考えられる。「両親学級や父親教室への参加」は影響していなかった。また、「子育ての悩みを友人・同僚に相談したことがある」が父親の育児参加度を有意に高めていた。この結果に関しては、子育てに関わる父親も母親と同様に悩みをもち、誰かに相談したいというニーズをもっていることを再認識する必要性と父親の悩みに対して社会が制度としてしっかりと吸い上げる必要があると考えられる。本研究では父親の悩みの内容について調査していないが、母親との共通性と相違について調査する必要がある。さらに、「妻は、子育てに関する自分の頑張りを誉めてくれた」や「妻は、仕事での自分の頑張りを誉めてくれた (負の関連)」については、父親の育児参加を当たり前のこととして捉えるのではなく父親の努力として認め、育児参加と仕事の調整という行動を誉めることが父親の育児参加の促進に重要であると考えられた。また、「子育ては、男女ともに協力して行うものである」や「子どもを育てることに余り関心がもてない」については、固定的な性役割観に捉われない価値観や次世代育成観といった価値観が父親の育児参加の促進に影響していると考えられた。

最後に、子どもが 0 歳時点において、子どもが「多胎」であることが父親の育児参加を促進していた。この結果から、子どもが 0 歳時点における多胎育児の育児負担の強さと

父親の協力が不可欠な環境がある可能性が示唆される。多胎育児のための支援内容は自治体により異なるが、多胎家庭においては、0歳時点における育児支援の充実が特に必要であると考えられる。

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

1. 林知里, 岡本愛花, 神林優花, 花田佳奈, 渡邊えみ, 中島美繪子: 育児参加は父親にどのような影響を与えるか—多胎児の父親と単胎児の父親との比較—. 千里金蘭大学紀要, 9:67-75, 2012. (査読有り) DOI: なし

[学会発表] (計5件)

1. 林知里, 二卵性男女のふたごにみられた twin language, 日本双生児研究学会, 2013年1月26日, 慶応義塾大学三田キャンパス
2. 林知里, 加藤憲司, 本多智佳, 秋山明子, 早川和生, 双子の父親のワーク・ライフ・バランス: 育児参加が双子の父親に与える影響の検討, 日本公衆衛生学会, 2012年10月25日, サンルート国際ホテル山口
3. Chisato Hayashi & Kazuo Hayakawa, Social Competence and Self-Assertiveness of Japanese Twins at School Age-Influence of the birth order in twins- 2012年4月2日, International Society for Twin Studies, Grand Hotel Mediterraneo, Florence, Italy
4. 林知里, 双子の父親の「子育て観」、「子ども観」日本双生児研究学会, 2012年1月28日, 東京大学教育学部附属中高等学校
5. 林知里, ふたごの父親の「子育て観」、「子ども観」, 日本子ども学会, 2011年10月1日, 武庫川女子大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 知里 (HAYASHI CHISATO)

大阪大学・大学院医学系研究科・特任講師
(常勤)

研究者番号: 50454666